

世界防災フォーラム 仙台市主催テクニカルセッション
「心の復興を支える『文化力』の仕組みを探る ～心をつなぎ 力をつなぐ～」

1. 日 時 平成 29 年 11 月 26 日（日）16 時 20 分～17 時 50 分
2. 開 場 仙台国際センター会議棟 3 階「白樺 1」
3. 主 催 仙台市（文化観光局文化スポーツ部文化振興課）
4. 入場者数 85 名
5. 構成・登壇者
 - 映像「3.26 音楽の記録」上映
 - 基調講演「文化への期待」 小松弥生 氏（埼玉県教育長）
 - パネルディスカッション
 - モデレーター 小松 弥生 氏（埼玉県教育長）※東日本大震災当時、文化庁文化部長
 - パネリスト
 - 大澤 隆夫 氏（公益財団法人音楽の力による復興センター・東北 代表理事）
 - 菊川 穰 氏（一般社団法人エル・システムジャパン 代表理事）
 - 福本ともみ 氏（サントリーホールディングス株式会社 執行役員 コーポレートコミュニケーション本部長）

内 容

【映像「3.26 音楽の記録」上映】

震災から 2 週間後の 2011 年 3 月 26 日、仙台駅から徒歩 10 分ほどの場所にある寺院「見瑞寺」で開催された第 1 回目の復興コンサートの様子や関係者へのインタビューをまとめた記録映像を上映しました。



【基調講演】

「文化芸術による復興推進コンソーシアム」（文化関係団体や文化関係者等の緩やかな連合体）での活動や文化庁、美術館勤務のご経験等を踏まえ、ご講演いただきました。

災害時において文化力が発揮されるためには、平時のうちの文化関係者や文化施設、地域住民とのつながりの強化や、文化の様々な分野における全国的なネットワークの構築が必要であること、災害時においては支援者と受援者（支援を受ける方）をつなぐ優れたコーディネーターが必要であることなどがコンソーシアムの活動を通じて分かってきたとのこと。また、文化による支援を長期的に継続するためには、実際に体験してみないと分からない「文化の力」をどのように人々に伝え、支援へのサポートへとつなげていくかということが大きな課題の 1 つなのではないかということもお話いただきました。



最後に、海外における文化を使ったまちづくり等の事例や、観光や国際交流、福祉、教育、産業など幅広い分野と文化との連携を意図する文化芸術基本法の施行、東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムの動きなど、文化への期待が非常に高まっている現況についてもお話いただきました。

【パネルディスカッション】

東日本震災後から音楽による被災地支援を継続的されている企業・団体の方3名をパネリストにお迎えし、小松氏の進行により、ディスカッションを行いました。



大澤氏は、被災者と音楽家とをつなぐ中間支援組織を震災から2週間後に立上げ、100名もの音楽家とのネットワークを築き、避難所や仮設住宅、復興公営住宅など被災地の様々な場所に音楽を届ける「復興コンサート」の活動を行っておられます。これまで700回を超える復興コンサートを開催しており、コーディネーターが被災地のニーズと音楽家とを上手くマッチングし、被災地との協働作業により信頼関係を築きながらコンサートを作ってきたこと、音楽家の生業とボランティアを両立させるため、有償ボランティアとして、音楽家の方々にご協力いただいていることなどが、活動の持続性の確保につながっているとのこと。音楽の力による復興センター・東北は、仙台フィルハーモニー管弦楽団から派生した団体であることから、全国にあるプロオーケストラにも同様の団体を作ることには基本的には可能であり、将来どこかで起こりうる次の災害に備え、そのような団体が全国的に緩やかに連携する組織があると望ましいのではというお考えをお話いただきました。



菊川氏は、ベネズエラ発祥の音楽教育プログラム「エル・システム」の手法を用いて、被災した東北の子どもたちにオーケストラやコーラスの経験を通じて「生きる力」を育む活動を行っておられます。経済的負担なく子どもたちが等しく参加できるこの音楽教育の取組みは、活動地域の教育委員会とタッグを組み、自治体の事業として位置づけることで、地域に根差した効果的、継続的な活動へとつながっているとのこと。日本が直面している様々な社会課題や社会的な軋轢のある環境を子どもたちが享受し、自ら未来を切り開くことで、子どもたちが生きる社会を活力のあるものへと導くという活動の長期的なビジョンについてお話いただきました。



福本氏は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とサントリーホールディングス株式会社が設立した「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」の活動に携わってこられました。一番の課題は被災地のニーズの把握で、被災地目線による支援のあり方について模索する中、大澤氏と出会い、被災地支援に関するアドバイスや被災地との調整など、被災地に根付いたサポートをいただくことで活動を始めることができたとのこと。また、阪神淡路大震災時の支援に関する教訓が同社の支援のあり方に活かされたことから、どこの団体にどのようなスキルや知見があるのかという情報を集積させる仕組みの必要性を感じておられること、さらには、音楽家による社会的活動が評価される社会であることが、災害時における自発的な支援活動にもつながるのではというお考えなどについてお話いただきました。

